




論文博士の学位授与申請に係わる審査報告書

氏 名（本 籍）	齊藤 正高（日本）
学 位 の 種 類	博士（中国研究）
報 告 番 号	乙 第 3 / 号
学位授与年月日	2019（令和元）年 9 月 15 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
論 文 題 目	方以智の物理探索 一七世紀中国の自然学とイエズス会の学術
審 査 委 員	主査 荒川 清秀  副査 塩山 正純  副査 木島 史雄  副査 武田 時昌 

2019（令和元）年 7 月 8 日
愛知大学大学院中国研究科

本論文は17世紀、明末清初の学者方以智（1611-1671）の『物理小識』（1643序）を中心に、人間を含むその自然論、自然探索の方法を明らかにしようとしたものである。

全体は6章からなる。

第1章は明初に始まる桐城方氏の歴史をのべ、当時西洋から押し寄せつつあったイエズス会宣教師たちと方以智の交流を述べたものである。方以智はその生誕の百年以上前から、故郷に先祖の顕彰碑が建っている名家の出身であり、すくなくとも曾祖父の代から著作があった。この点で方氏の祖先を理解することは、方以智の学問を理解するうえで重要な要素である。方以智は明末に進士となり、清による北京陥落をその眼でみた。以後、南下する清朝軍から逃れつつ、明の帝室をもり立てようとするが、最後に清朝に捕まり護送される中で亡くなる。その途中で方以智は曹洞宗の禅僧となった。齊藤氏はこうした経歴がかれの思想にも影響を与えているという。

第2章は『通雅』『物理小識』『東西均』『藥地炮莊』の各種版本を比較し、さらに刊行されている9種の著作の概要を紹介したものである。齊藤氏は上海図書館に所蔵されている版本から『物理小識』の「凡例」が游芸によって書かれたことを指摘し、『物理小識』は本来『通雅』の付録であるが、日本においても影響を与えたことを指摘している。また、『通雅』の中に見られる方以智の読書論、学問観をとりあげ、方以智が「書物は必ずしもすべては信じられない」が、「偽書にも理を明らかにする証拠がある」と述べ、「學」にふくまれる「交」（交）を字義の中心にすえた「自然と交わる学問観」を述べたと指摘している。

第3章「物の探索」は以下の章の前提となる、方以智の自然探索の方法論を述べた章で、『物理小識』自序にみえる「質測」「通幾」という用語について説明をこころみたものである。朱子以来の「格物致知」説について、方氏の四代にわたる解釈を参照し、父である方孔炤にいたって「質測」と「通幾」が生まれ、方以智がこれを自然学の方法論として位置づけたとする。

すなわち「質測」とは「感覚可能なものを表層からのぞきこむこと」、「通幾」とは「物を成立させている深層の気の動きに通じること」であり、ここに表層（費）から深層（隠）を見きわめようとする「脈診モデル」（不可知を可知に転ずる方法）があると、齊藤氏は考えている。「質測」の「測」は測量ではなく、ほんらい「水深を測る」という意味があり、表面に顕れている「質」を通して深層にうごめく「幾」を「のぞきこむ」ことであるとする。（p.144）

方以智は西学に対しても興味を示したが、西学は「質測」はまだしも「通幾」はだめだと述べた。その理由として西洋の自然学が元素の重さによる説明に終

始し、気の運動を記述しなかったからだとも指摘している (p.153)。また、方以智にとって自然の探索は「質測」「通幾」によって『易』を作った太古の聖人たちの探索をたどることでもあったとも指摘している。

第4章は方以智の「宇宙論」、第5章は「地球論」、第6章は「こころのありか」を問題にしたものであり、既出の3本の論文にもとづいている。

第4章の「光肥影瘦論」は『東方学』(104 輯 2002) に掲載されたもので、いわば、方以智の「光論」である。まず、西洋伝来の宇宙論にみえる太陽の大きさは当時の中国人には受け入れがたいものであった。この点を考察した熊明遇と邱維屏の論を通して、方以智は光の直進性に疑いをもった。かれは紙に穴をあけて光のふるまいを観察し、これによって光がつねに拡大し影がつねに瘦せるという「光肥影瘦論」をみちびいている。また、長江の幅の測量結果の不整合から目で見た光は水によって簡単に動揺し、測量を正確に行うことは困難であるとした。さらに、自然界で形が写しとられる現象の背後に光の気がはたらいっているとし、光が気の四種の運動形態(四幾)の一つであるとする。このような光に関する記述を総合すると、方以智の「光論」は感覚可能な表層から光の本質という深層を把握しようとしたものであり、「質測」と「通幾」の実践であったとする。

第5章「地の探索」は、イエズス会士が伝えた世界知識すなわちアレニの『職方外紀』を『小識』にふんだんに引用し、方以智が中国の伝統思想である「天円地方」を否定して、「地球は丸い」という地球説を受け入れたことを指摘している。この地球説の受容によって、天と地が上下に相対するという世界観、ひいては陰と陽、善と悪などの対概念のありかたも変容を被った。方以智は『東西均』で、対立するものが互いに依存するという「反因説」を立て、これを「至理」であるとする。そして、この「至理」を絶対(無对待)と相対(对待)の関係にまで適応した。その結果、絶対と相対もまた相対的关系にあり、絶対は相対のなかに感覚可能なかたちで流行することになった。したがって、地球説によって、天と地が上下に対立する関係から、天が地を包む関係に変容したように、「真陽」が陰と陽を統べ、「至善」が善と悪を統べるという関係に対概念のありかたも変容した。この「反因説」の背景には「絶対や根源さえ把握すればよい」とする方以智が理解したところの当時の学問に対する批判があったとも指摘している。

『東西均』源流篇には、「源」と「流」について「反因」の関係にはないという批判が想定されている。一般に「源」は「流」をつくりだすが、「流」は「源」を作り出さないからである。方以智はこれに対して弁護をおこなう。まず、「一つの源から流れが生じる」のではなく、地上の「源」は地面の凹みの数だけあり、「流れこそ海に帰着する点で一つ」であると指摘し、「一つの源」など自然

界にみられないと指摘する。イエズス会士の記述や中国の神話にみえるように、川の水は海に注いでいるが、海があふれることはない。これはなぜか。降雨による水循環も考えられるが、方以智はこれを取らず、「地心の源」という地下構造によって「水循環論」が行われるとする（p.261—265）。この水循環によって「源」と「流」も相反するようにみえながら互いに依存する「反因」の関係にあると弁護するのである。この「地球規模の水循環」の指摘は、地上の流れのなかに地球中心の源の力をみるということであり、その背後に「質測」「通幾」の「脈診モデル」が働いていると指摘している。また、『東西均』には「水循環は経絡に似ている。潮汐は地球の呼吸である」（p.274）という観点がみえ、方以智は地球が生物であると考えていると指摘している。

なお、本章は『日本中国学会報』（59 集 2007）に載ったものを元にしていく。

最後の第6章は「こころ」のありかを問題にする。従来の研究の中に、方以智が脳を「こころ」の場としたという指摘があるのに対し、齊藤氏は、方以智はそれが師である熊明遇の著作をそのまま引いたものであることを確認し、さらに方氏の医学、およびアダム・シャルらの著作にみえるガレノス医学の『物理小識』における引用を確認し、人体の理論には西学の影響が希薄であることを指摘している。そして、方以智は精神のありかを脳か心臓かという観点でとらず、心臓の「火」と脳の「水」によって出現する身体システムであると論じていることを指摘し、「心臓は感覚の種火、脳は記憶の媒体。どちらも欠かすことができない。これらが相互に作用して、こころという現象が成立する」（p.318）とする。「こころ」は「質測」だけでは理解できず、体内の元素がどのように働いているのかという深層のうごきに通じる「通幾」を通してこそ理解できる。つまり、ここでも人体の表層から「こころ」という深層の働きを把握しようとする「脈診モデル」が機能しているとする。

なお、本章は『日本中国学会報』（61 集 2009）に載ったものを元にしていく。

以上にとりあげた方以智の自然探索のありかたは、イエズス会の伝えた学問との関係でいえば、受容したものもあれば、批判したものもあった。そして、その根底に表層から深層の生命を把握しようとする「脈診モデル」が貫かれていることを齊藤氏は指摘している。

【口頭試問】

口頭試問は6月29日（土）の1時半から3時15分まで行われ、そのあとの判定会議も3時45分まで行った。それは齊藤氏の論文から広がる様々な問題に議論が及び、あかたかも方以智シンポジウムのような観を呈した。

口頭試問ではこの分野の専門家である京都大学人文研究所教授の武田時昌氏に加わっていただき、より広く、深い観点からのコメントをいただいた。武田氏は齊藤氏の本論文を高く評価された。すなわち、方以智は従来西学の紹介者的な扱いしか受けてこなかったが、本論文では、中国伝統の深い学問、とりわけ「易」との関連で、それらと格闘した方以智像が描けているとした。ただ、方以智の学問の鳥瞰図が今一つはっきりしないこと、他の同時代の思想家たちとの比較があると、方以智の位置づけがよりはっきりしたのではないかと指摘された。また、第2章では本論文でとりあげた『通雅』『物理小識』『東西均』をより深くとりあげるべきで、伝記を含め、他の研究者がすでに行っている研究は省略し、西学に対面してもゆるがなかった方以智の伝統的学問の掘り下げをより徹底してやってほしいと評した。

審査委員としては、齊藤氏の論文に不十分なところがあるとはいえ、これ自身大きな成果であることを全員一致で確認した。齊藤氏には、本論文を一つの里程標として、方以智の自然探索をより広く、また深く探究してってもらいたい。審査委員会は、以上の理由により、本論文を博士学位論文として十分な資格があるものと認める。